

イタリアに拠点を持つ日本人指揮者が増えている。音楽ではオペラを学ぶ声楽家の留学が多かったイタリア。その「歌心」や歴史の深さに引かれ、日本との交流にも積極的になっている。

日本でも演奏会  
パチカンと西本を結びつけたのは、自身の先祖が暮らした長崎・平戸市。親族から数多くのオラショの存在を教えられた。「世界の人々にオラショを知ってもらいたい」という西本に、パチカン側も興味を示した。パチカンでの演奏曲は日本でのコンサートでも紹介

昨年11月上旬、ローマにあるパチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂に、指揮者の西本智実の姿があった。西本は2013年からパチカン国際音楽祭に毎年参加している。今回は自身が芸術監督を務めるイルミネーターフィルハーモニーオーケストラと合唱団が、カトリックの原始的な宗教歌であるグレゴリオ聖歌をもとに長崎の隠れキリシタンが伝承してきたオラショ（祈りの言葉）や、モーツァルトの「戴冠式ミサ」などを演奏した。

日本人指揮者、イタリアへ渡る

オペラの歌心 歴史に深さ



昨年11月、西本智実が「オラショ」などを指揮したサン・ピエトロ大聖堂

する。15年にはイタリアの作曲家レスピーギの「ローマ三部作」全曲演奏会を日本人指揮者もいる。この



マンゾーニ劇場のロビーでザニョーニ理事長と話す吉田裕史(イタリア・ポローニヤ)

異例の監督起用  
吉田はポローニヤ歌劇場フィルの定期公演を指揮するほか、同フィルの音楽活動全般を統括。歌劇場のオペラを指揮することもあつた。日本で人気のあるオーケストラは、ドイツやオーストリアに多いが「イタリアのオケにはオペラを基盤とした歌心があり、表現力などの国にもまねできない。技術よりも感情。指揮者として魂を開放することの大切さをイタリアで教わった」と話す。  
西洋音楽のルーツである宗教音楽やルネサンス音楽などを数多く生んだイタリアの音楽史は欧州の中でも深い。オペラでもベルディやプッチーニらが傑作をつ

街の「マンゾーニ劇場」を拠点にするポローニヤ歌劇場フィルハーモニーで芸術監督を務める、吉田裕史だ。14年に就任し、このほど21年間で3年間の任期延長が決まった。  
ポローニヤ歌劇場はイタリアでも有数のオペラ劇場。吉田が率いる歌劇場フィルは、この劇場の専属楽団を母体とする自主オーケストラだ。歌劇場ではオペラを演奏する定数が多く、それ以外の交響曲などを自由に演奏するために結成された。  
「以前は日本のオペラ歌手がイタリアに留学するケースが多かったが、近年は指揮者や作曲家など多様になった」と話す。ベネチア在住で日本やイタリアのさまざまなオケで指揮する三ツ橋敬子や、ミラノ在住で現代音楽を得意とする指揮者で作曲家の杉山洋一などもそうした人材だ。  
「イタリアでなら、オペラもほかの音楽も両方学べる。この国の文化や生活に日々触れることで、音楽的なインスピレーションも得られる」と三ツ橋は話す。日本とイタリアの間で、音楽の新たな化学反応が生まれるかもしれない。

(文化部 岩崎貴行)